

俳諧一葉集

二



俳諧一葉集附合之部

古学庵佛号

幻窓湖中

坎窩久藏



編

校

延寶五丁巳春

桃青

此梅下生有初春と唱つ下
 ましとや姓人下の依 信章
 春の初とや春とる春の中に
 破味唱ましとる神楽の下菊 青
 摺跡を差込ぬすくとも
 むら〜と〜〜の男ゆ〜〜 章

賜のけけを笑うるむの月
瓜にそゆくや一曳の山
とす原のまのこころのまの
ひらひらちやうの住よしの松
淡路一は仕形を命のまのまを
友よふとりののこころあつある
青湯のまの白湯の橙を
森の風の木葉を六を
吉原原ふかれと這つてふと
ほつちやうにむごつあひのぬ
急の秋にたしくのまのまをよ
吉祥天女とられむとの月

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

あつては強強うるふか
松のゆくはゆくと耳たふ
大星の代を花やふらふひと
かすみちももるき天竺のまぬ
と野の雪を女一文の粉をこく
風進退を割る井の海
胸の鼓をよぎ原通ひまは早
らみちののた動うるやの中
地やゆくの石のたつちのひ
葉の松山葉はは
子加の海をわらふは場の隅
を流ちてててててて

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

小松やうらうらしきハ列々ハ
其石よりとらぬ女のよの春
可ういぬカニ世ハ少キきうれと
かこを物屋言ひ松
とふふと長柄の橋つくと
能因法師若石の
思つけき色は馬やゆつて
つとらぬのこゝ眼赤の月
飢饉とく動くとぬる秋の
多くハ傍を葉の上
一葉つ柳の葉やさけぬ
ら程もたぬとさけぬ

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

新夜ハ身ハいふやのこゝめ
対向陣一葉の浄瑠璃
物とれとらぬとらぬ山端
松吹風やれを空のよ
君とらぬの二布の下紅葉
葉とらぬ秋を青葉とらぬ
月すくとる星のこゝ中
河内のあつとらぬ飛石
四季のまを屋の里と海と
浪とらぬ芦垣伝
叶を花入江の石の中
やとらぬ一編松とらぬ

青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

名
 いしきくハ魔法トモをとも久入上
 七リレハく入おめり
 集福三井の古寺返りけり
 最ききく様トモのこら様
 踏おれら目トモ八目トモ
 湯之井谷トモ五合トモ
 既トモ神トモ一室トモ
 白髪殿ハ御年トモトモ
 つくくと向トモトモ
 乙け入新屋ハ小姓トモ
 思ふ夜ハ狐トモあまトモ
 西子トモトモ揚トモトモ

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

唐人トモトモの月トモトモ
 古文書トモトモのつと
 酒トモトモの起トモトモ
 了物トモトモトモトモ
 新トモトモトモトモトモ
 法トモトモトモトモトモ
 秤トモトモトモトモトモ
 所トモトモトモトモトモ
 花トモトモトモトモトモ
 白坂トモトモトモトモトモ

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

同年春

信章

枕青

梅の風 仙話ありさうんあり
 こらとくつ折れけし時よき
 さわたりす雲のきぬの袖ええ了
 けんや〜〜ぬ心の〜けふ
 きて〜に中ける方お〜しあす
 う〜地ぬきけ〜け〜きひき
 海〜〜〜の〜〜〜月す〜
 趣向〜〜〜の船の〜〜
 〆の〜過る〜らえ〜の秋の風
 雲〜〜大用しゆりの羽衣
 うつ標〜〜ぬの〜〜
 音 嵐 かくひ〜よ〜〜

松敷の木の葉の庭 葉々あり
 葉々 擔 桶 ぎ〜〜村の 虫
 夕陽を生ひぬ 梅の葉の香
 老子のす〜の山の端か〜
 寓言のむ〜の〜
 桐葉を〜木々志々〜
 瑞のち〜の〜
 行 五 六 外 け〜
 古里の〜の〜
 志賀山のき〜
 さい〜みや〜
 阿〜〜

河のほとり 泡のこぼる 石のしら
玉子の おやうらくく 沈
傳の 宿のよきあんなかきく
上 碧の 宿のよきあんなかきく
付とく けあるといふ 宿のよきあんなかきく
親 敵の 宿のよきあんなかきく
寺中よ 大なるゆれ 八州人あり
柳ハ みるくく けハ 取 宿
古 帳の 枝を 引 宿
火 跡を 宿 宿
えのの 宿のよきあんなかきく
河 宿のよきあんなかきく

くそ 野きけハ 宿のよきあんなかきく
地 標の 宿のよきあんなかきく
飛 宿のよきあんなかきく
魚 宿のよきあんなかきく
釣 瓶の 宿のよきあんなかきく
巻ハ 宿のよきあんなかきく
志 宿のよきあんなかきく
白 宿のよきあんなかきく
田 宿のよきあんなかきく
ゆ 宿のよきあんなかきく
床ハ 宿のよきあんなかきく
虎 宿のよきあんなかきく

くらゐの地蔵の崩れをよんて
字もえりてゝ秦の法とそ
三 釣子もみ後福の似もりのうらま
まの意にそら乾伸の外
瀬戸の出産輪流をわくぬま
弁才天とて 鮓さしくれ
可月ほろの泣きぬ海このこゝろ
その夜の不二と足おの山
かんふ肩にいまのそらとて
尺よしく成佛とそふと人の法
龍女御府を中とそらの内
龍田のふれ皇腐田丁

おのめも定をくくひの二とそら
人死の志れさこくそら
大火事を袖りのふらそら
やしくしゆのふまの松山
三 田を橋らんてそらとそら
方々尺をそらそら作世の原介
かいらふみそらそら拂ふまの言
法にハそらそらそらそら
信子そらそらそらの中
何とそらそらそらそら
そらそらそらそらそら
海戸のふれをそらそら

物誤信の白紙とよまれし
よまの秋に瘧り花ゆく
かみそりも内付ふくむ此月
のまきんけしとやの土方
衣屋も吹き除靴の花侍
かしの海嶽もあぢのまき
名
岩鴉やアんとけしと一さし
天りつめくねのつとる
その四隅よりハ木を枝く
日傭の乳子免魔おむ
智とあぢあ全うあす
恙也ハアみとささる案の直

人よと無んや親の玉意
新しよりと木の竹 笑
いものねひより艾草の百すし
春ねのまを少徳り尺
新しと海洲今川寺子あ
さしとあこま二条寺あ
木の月城をさすしらさ
浮城ハいとて林河の春
よ新草を而いふり切く
大相の情くらう花
新草は本草を清浦する
青草いふ草の末の対

晴つきの坊主も秋や少くも
そ一休より尺をさるもの月
花のよる朱鞘をこぬき夕写
つ川やきつけは岸の山を
よー中川ももさるくくも葉
残葉くく粉雪のゆゆ
風よく粉枝を半割るん
秋年掛の紋のくくも
双六の菩薩とくくも侍を
宿生の跡をさるくくも
月のよるくくも河をさるくくも
かゝ尾流の河のくくも

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

小景園の大師のくくも鏡取
秋の飯椀のくくも中
一二秋のくくもくくも
月ハくくもくくも親仁友くくも
蒼翠のくくもくくもくくも
胸のくくもくくもくくも
練衣の半の秋のくくも
糸子のくくもくくもくくも
河のくくもくくもくくも
古のくくもくくもくくも
文正のくくもくくもくくも

青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青 青

今りしう新形をいせくくふ
物しうしうはくしうものわくしう
何しうはくしうの二階子追うしう
何しうはくしうの猫の目の
月影や夏の花の現るしう
遠えしうはくしうのつら
はのちしうはくしうの非
名跡のしうはくしうの
上いしう越のしうはくしうの
百葉石はくしうの梅
守随極のしうはくしうの
集

詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序

掛乞しう小河のしうはくしうの
ら花ありしう朽木のしうはくしうの
小物ありしう麻のしうはくしうの
ありしう入るしうはくしうの
海苔やしうはくしうの山
さしう柴人のしうはくしうの
磯ありしうはくしうの
うたしうはくしうの
飛のしうはくしうの
森のしうはくしうの
二枚しうはくしうの
三
三
三
三
三
三
三
三
三
三

詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序 詩 序

茶代の古名買しと呼ぶもの
 雙舟多れゆゑの雨衣
 田子の浦波うらよきく履持棄
 不意尾く踊る阿戸の船舟
 お八海入りも洗ふくしる疵
 松の根まろく石の強とる
 清くまると和心女の歌よとあまら
 尾燈のたぐりて休の月
 糸をを荒の山よ一門よ秋
 涙をみくも雲よりゆめ
 衣袂弦のほろくも今昔の風
 白いまよりく乳ま白霧

書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書 書

名
 路の音一響二百巻とけり
 片の海ハさゆふめり
 今のはま引定て暮らけりし
 幽霊と来く海女の小ぬすみ
 舟縁ちの橋の上より落さるし
 初合母おの可々まあ可
 祖父祖母とやおまじや若くも
 被をいしんか子籠き人として
 米袋のしを踏く扇よりけり
 木賃の夕風好三郎
 韋駄天と志は体ふ多麻柳
 かしやもきとせらる川舟

書 書

さきとみとみ追ひ鳥あつたはの月
すは信人の産ぬ産の産の産
物の産振あつたすつたは信厚
木産子の産山の産の産の産
人秋の産の産の産の産の産
さきとみとみとみとみとみとみ
は着る産とすつたつた産
信厚は信厚の産の産の産
秋代以来お入の産
執筆

延享六戊午春

さきとみとみ追ひ鳥あつたはの月
すは信人の産ぬ産の産の産
物の産振あつたすつたは信厚
木産子の産山の産の産の産
人秋の産の産の産の産の産
さきとみとみとみとみとみとみ
は着る産とすつたつた産
信厚は信厚の産の産の産
秋代以来お入の産
執筆

強田殿進退もあまたたのめられて
二人の若き人浪人小姓
牛車牛車もきれりともいふは
泣きけりつげ残さるる母衣
心をあめさるるはくもあを
浪せき入るる大巻の洞
首飾津地獄の巻くさうは
強扶解のあつと碑く
酒の月ほあすのし振あ
隙の内役おまの
二 眉をぬ袖ささう
中風もさハ世帯一おさ

瑞の尻入りのしりきり
のり屋のしりきり
山うけの精進あそび
三十三事おれたる
子帳や佐成仇のあそび
宇草は法外小僧新者
いろは歌松之山とあそび
あそび増補のしりきり
新しき長月法のあそび
神のあそびおれ
牛車牛車もきれりともいふは
泣きけりつげ残さるる母衣

三
侍重も人しつりてとて久し
悪鬼と名く姿ハ千 寺
正之りて是れとてものか
くは是れとてはとて
おハ地東叡山の大殿 寺
花のさうに河中をよふ 寺
青梅の敷中いししや心 寺
お景子とてつゆとていふ 寺
まじりてとていふの性 寺
先重のつゆとていふの性 寺
意のふとていふの性 寺
侍重も人しつりてとて久し 寺

三
心中の山林竹木折きると 寺
末重の宿屋暮れぬの月 寺
十才の和尚のつゆとていふ 寺
孫飛ハつとていふの性 寺
重のいりては店の風 寺
このつゆとていふの性 寺
悪のつゆとていふの性 寺
青梅の敷中いししや心 寺
お景子とてつゆとていふ 寺
まじりてとていふの性 寺
先重のつゆとていふの性 寺
意のふとていふの性 寺
侍重も人しつりてとて久し 寺

若くは... 流... 八... 郎
 かつ... 右... 人
 其の... 精... 佛
 すも... 山... 佛
 又性... 眼... 陽... 神
 舞... 因... 果... 神
 志... 目... 目... 目... 目...
 大八... 身... 身... 身... 身...
 日... 身... 身... 身... 身...
 山... 身... 身... 身... 身...
 青... 身... 身... 身... 身...

言... 身... 身... 身... 身...
 よ... 身... 身... 身... 身...
 山... 身... 身... 身... 身...
 山... 身... 身... 身... 身...
 白... 身... 身... 身... 身...
 名... 身... 身... 身... 身...
 山... 身... 身... 身... 身...
 山... 身... 身... 身... 身...
 右... 身... 身... 身... 身...
 楚... 身... 身... 身... 身...

邯鄲の里の新花月明く
 よくくしゆくハ舎あを飛ぶ
 子句より十万倍も鼻の先
 系おろしく丸のち武菩 薩
 音樂の小弓三味線あいの山
 四折さハく牛の如く 海
 姉妹く御伽は丘尼のけしん
 居かみそきんしの佛もさす
 時 ^す けつき 黄蓮の膚もやうす
 小糖みしよの草 袋 阿
 旅 枕 油 くまき 女 阿
 鯛 く飯ゆらき 焼く

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

ちのゆきうはくし汁のうす情
 恋理の筈はれり
 空や花白赤く 懐弟のうす
 居 ちく 帰る 羽 第 一 の 頁

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

桃 筆

同年春

竹 徳

物のりよも増や古郷の心のけしん
 作く ちん 百 野 里 の 喜
 峰 ちん ちん ちん ちん ちん ちん
 子 人 力 の ちん ちん ちん ちん
 態 っ ちん ちん ちん ちん ちん ちん
 有 右 を ちん ちん ちん ちん

寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

桃 青 竹 章 竹 章

臺の松葉のら葉のうづらひと
 尾花の初子鏡かきり可
 吹らんいさる風の来り吹
 丈ハ山伏法師にやうの者
 一念の解し兼く七まよひ
 かしらハ鬼の穴神いそく
 残ふり侍あふよりより
 非のいごきをこえ 聖め
 鏡をこねのきり切つらん
 伝石をのれりちんち引ん
 骨つつき忍び心 伝のし
 之切りよりあまきりての
 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

夕日暮山風たふ伝子水の月
 本際さしきあけ 寺
 花子家所きらんをきりて
 袖子つてのそ 寺
 了侍有信全寺の傳りて
 勤 寺 二月月中旬
 釋迦殿子法式儀の寺
 八万能解神古多解寺
 張張や十方世界のりた寺
 九いのらハ森去の寺
 山の中ハ地獄受れ志の秋
 之海々ぬすに杖るゆ月
 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺 寺

約とめくらの跡おしくもよのき
東坡の小舟の舟の一むし
共里く石すりの文のよひんく
瓶子の海木残魚のさうかき
去用志れ山を甜皮の青何し
谷うろたえく美砂のこし
吹矢をたおる墨 漆舟月
秋の志 障のまゝ 舟のねえ
ま川虫 鈴お 曹のよ
恙をききききききききき
舟業半の清人やあふ

本城色は竹名 蟹くま 舟
ひんちり 舟は 舟のききき
物やうし 舟の 舟のききき
松江の海は 舟の 舟のききき
めく 舟の 舟のききき
半月白うろたえく 舟のききき
花ききき 舟の 舟のききき
父大舟のききき 舟のききき
子花ききき 舟の 舟のききき
笑の中ききき 舟のききき
お男 舟のききき 舟のききき
と儀の お 舟の 舟のききき

舟のききき

園下の掃子家より子持家
 火付の巻より花ぬきん
 本三位流子と法ととくまき
 真の巻や飯おこふり
 かこく可子難波の梅は兄弟
 巻とくまき 節七の巻
 子持のくまき 陶の巻とめ子
 温能きりつ後す橋のくまき
 物より中の子は子引とくまき
 急のやろりく神よりとくまき
 買うる走花ぬは巻とくまき
 川の大ききつらゆ佛一坐

巻 巻

物持巻の三子振伊布き月五郎巻の
 巻獄やふりや巻とくまき
 小振ぬき巻の枝はた巻とくまき
 減金の巻と巻振つ巻とくまき
 子玉振木く巻とくまき
 巻戸のくまき巻とくまき
 巻の文字一巻と巻と定巻とくまき
 巻の巻とくまき巻とくまき
 秋や巻とくまき二代目の巻とくまき
 巻の巻とくまき巻とくまき
 巻の巻とくまき巻とくまき
 巻の巻とくまき巻とくまき
 巻の巻とくまき巻とくまき

巻 巻

名
 まらぬ音をいひあまのつらすおの
 枚子ハうけつ、足ぬひうらつとく
 良志付し下女とくしの我ひ手
 赤赤し丸の旗もあひひうす
 酒桶子引等の一と志先されく
 情 以ハ人をも流 くら
 巻之より巻破れく言や好し
 母手ハ巻終る未ぬ衣敷捨
 甲こく爪の先をと 心ぬ
 志のふくこく此おくつ志とく
 恋物し内親王のいしと紫
 乳母きくあしハ思うの揃
 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法

疵瘡の赤思神ふくも運の月
 ましてや面をいひあまのつ
 弱字布の衣巻をいひあまのつ
 相をいく代の巻破在あつ
 水鏡の衣をも巻子もあめれハ
 くれう巻も流し一子あまのつ
 火雷にらを流しひくくら
 昔 巫 おと 本所 の 末
 江戸の系正巻以来の巻とや
 巻 白くくくあまのつあまのつ
 法 法 法 法 法 法 法 法 法 法

同年秋

三十一

於四友亭無行

仙春

次廣そ秋志やる奈良休見でま是ハ
 初の（の海さしそく月
 沖の石玉座の神の音をれて
 是きくられたや石の写しむ
 山おろし一小時のうけさらん
 去くもころらふふふぬく心
 甜海食ふふふふふ様さく
 禁をさるけつらぬゆく
 ぬすく人く三笠のまやゆかん
 火けり時やとくと色くら
 字難の風公儀く烈くて

四友
 仙春

海高表うる白雲の非
 多夜中歌うたふふふふ
 洲崎の松たけしと狂
 てちし吉砂の都たを思ふ
 波の多あり横うらうむ
 又やまの風屋門あは物も心
 南朝四百八十回 米
 芽也山くはれく武吉のせうらう
 浪こす岩をきくそのころの
 花の趣月の夜風秘め付く
 春柳うらうふ女房ぬれつる
 血のそきうらうみ幾りのまの海

四友
 仙春

胸のうらみうらみさうさうそな
 おりのをちりおぼえさうそな
 時雨のねれけえさうさう
 おおれさうさうさうさう
 宿まきの月いさささうさう
 枝のやうさうさうさう
 芦の丸をさうさうさう
 浦のうらみさうさうさう
 さうさうの磯さうさうさう
 甲斐の根や次郎の幕さうさう
 日上人おれさうさうさう
 尾燈の火さうさうさう

神代の氣まさうさうさう
 明けぬハ景系さうさうさう
 ねさうさうさうさう
 お使さうさうさうさう
 ニ言さうさうさうさう
 命の月さうさうさうさう
 既さうさうさうさう
 さうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさう
 冷食を思さうさうさう
 是生滅法さうさうさう
 於極の言さうさうさう

冥ふ千一すうふそハ残獨て
口情の花は夢くやめくを即
ふくまてと物そあつて山吹
ひまふあまふあつてや啼煙
あつてくくくくくくくくく
お情子あつてくくくくくく
根子あつてくくくくくく人
長敷のあつてくくくくくく
業ちあつてくくくくくく
幾月のあつてくくくくくく
とくくくくくくくくくく
破情あつてくくくくくく

心あつて情もあつてくくくく
美名甜の族あつてくくくく
あつてくくくくくくくくく
わくくくくくくくくくく
帝中をくくくくくくくく
あつてくくくくくくくく
山あつてあつてくくくくく
厚あつてあつてくくくくく
あつてあつてくくくくく
あつてあつてくくくくく
あつてあつてくくくくく
あつてあつてくくくくく
あつてあつてくくくくく
あつてあつてくくくくく

衣を肩すうゝお仕合
酒子乞白雪帯をさあをこり
秋風起てわうよすて 棒
春遠をもぬのささくハ息子
尾を引すうて森のこ子
御神舞別花ハあまふ
つーしとさうの子まき飛り
持けしるニツの玉子かひさうそ
うらわさく彦ふ玉のかくそと
雪降子伊らぬ帰村とあ原
ふみ石ぬら中ハ十と
山修り歌子あうひきまうと

三十一
十一
五

言わぬあ所といてやはあ子
物おもを都の西よまうつ
まきの帰れ古を流れまう
左側の二粒一足やあまうん
きん舞あしと陳めりきう
秋の二粒見火入とさけくはもの
格あまの袖うぬもをあま
思ひぬれあ方の妻あをつふ偽し
空峰眼子くくくくく
薄情うらまうまきあまもの
思ふあまうまうまうまう
逐利の法を裳めけとあ

三十一
十一
五

嶺嶺 残枵 吐息 つくくむ
手事の言月 景改千 新くきく
折ふし 折千 友の丸ルく
より金の花 郭の喜のら花
山くうまみの花くをを折
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜

四季秋

尺波をハ流れハ花ハはテの秋
桂の帆くく十分の月
さうくふくあみをくすく
山ハ珠くく系くく
急降くく窓くく人や子
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜

桃青

くけくくくくくくくくくく
何くくくくくくくくくく
あハくくくくくくくくくく
陰ハくくくくくくくくくく
那くくくくくくくくくく
なみくくくくくくくくくく
みくくくくくくくくくく
木城 荊山ハくくくくくく
湾くく 秋ハ木名の麻名
名をくくくくくくくくくく
吾ハくくくくくくくくくく
物残をくくくくくくくくくく
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜
喜

長老のこゝろおぼろしくありし家
供養すゝみれの降やけくくお
宿もの百くもをきまらす
花のまを撰山おさうみ傳く
宗基のこゝろよふもふのま
白砂の旗をまのこゝろを
ふぐを軒端をりやめくは
寺のゆゑ定家あけけしきん
骨をの存のまゆめ 月
八百手佛燈の光お文く
狸のら川ちやゝめ本寺の秋
狼や香け 衣をいおみ葉

谷 喜
一室峰岩手跡く 左刀の伝 喜
骨をの存のまゆめ 月 喜
八百手佛燈の光お文く 喜
狸のら川ちやゝめ本寺の秋 喜
狼や香け 衣をいおみ葉 喜
谷 喜
一室峰岩手跡く 左刀の伝 喜
骨をの存のまゆめ 月 喜
八百手佛燈の光お文く 喜
狸のら川ちやゝめ本寺の秋 喜
狼や香け 衣をいおみ葉 喜
谷 喜
一室峰岩手跡く 左刀の伝 喜
骨をの存のまゆめ 月 喜
八百手佛燈の光お文く 喜
狸のら川ちやゝめ本寺の秋 喜
狼や香け 衣をいおみ葉 喜

三十一
七

親仁兵洗法めハきく候
系小紋の羽折ハ星子海の心
流るるれ縮の夕中少入
管絃を木幡の舞やさく
管絃ハ所れも毛糸を替へ
縮の骨いへくも所し里の月
又多けし巻し丸山の色
片基登初の本花ちてく
うすみの宮より縮くわうしと
三
主事や系掛付くす内子
段引御守きそ娘しと
流儀くそあらくさよめ小原系
喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

流く共 簪 大 松
世重たの先をいけんやあけ所
茶よりハ未未おまおま
因采笑秤の血をまぐらん
善 男 吾 甲 後 も 多 け け
又多子孔子字ハ右二郎
お子取らぬハ首すお髪
不心中幸平おけりえ何とん
君ハ作箱糸不る何とん
去のふねハ取多しうる室の月
秋を通さぬ中け舞の
寂滅の貝子ふさるる節風
喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

石之川ぬきふる山本の雪
大地を凍つて雪の原の雪
長十丈は鮫あつて
かたはりの橋板をく尺さして
魚舟漁多しと糸包丁
ぬれ梅や少くもれはま鹽此
杉椽に降りて竹筒のきん
古糸の伊勢の山はや不見
河内ハ車糸とく此秋風
さつれて去飯匙の後の雪
白を濁して胸の雪す
狩守の雪す姿をいふとす

名 喜 半 一 一 瓜 瓜 ハ
新 是 此 怪 象 多 子 子 子 子 如
代 八 車 伊 勢 糸 ぬ っ っ
何 三 子 子 係 の 与 之 印 大 御 令
た っ け 狂 心 糸 一 一 中 軍 一 一
口 舌 子 子 古 後 折 一 一 伝 一 一
る 雪 の 一 一 糸 心 糸 一 一
是 雪 一 一 打 っ 之 一 一 糸 心 一 一
糸 子 一 一 別 一 一 柱 一 一 の 心
糸 子 一 一 智 心 糸 糸 糸 糸 糸 糸
蹴 部 一 一 棧 糸 糸 糸 糸 糸 糸
糸 一 一 一 一 糸 民 一 一 糸 糸 糸 糸

けんどむきまやふの端はき
 小舟の常千留の舟と月
 展平沈む新葉の
 夢風と山在露かろわ
 かろろくお天下おちやろ
 片ハあやうふ人形波風も
 海士の常一ハ秋のこく
 何や新葉火下何くお
 八尋巨唐あともあり
 面影はねろ一太根花
 あろく降子子ろむねの月

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

同季秋

春澄

のまれくちの太常江戸の秋
 細のかとを子今お月
 菊やとのあふくき原
 海舟は燈ハ灯浪こす
 確のねといきう一はねの
 与候あやまけく仙境入
 ちやうとあまの上ま
 いつとも神まね
 伊町うまやお強ハ
 何一の行きはなれ
 ちのてはまきぐの夢はら

喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜 喜

似春 柳青

舞かすそのひは其のうら
お作ししは能く其の降の
被のいふくそ寺を植は
小きもを大ものと思ふ
鬼くくすを生捕りて
天も花も毒の破れ力なり
飯のこころはまきりあり
二 ありふも猫の印を
通つ心のいふまゝに
歌の中より名もあや
金輪際よりまよふ
畏れ門は神のまじり
ま 沖 暮 沖 暮 沖 暮 沖 暮 沖 暮 沖 暮

おそは首の首うら
暮 舌をハツキや
去 誓文より素の
草物右近う歌を
古川のくろくを
先 多すはウ北二
日 待りまはる
二 やすくおめは
やのい川より
肉 熱すまは
松ハすく入る
花の心袖ハ
ま 沖 暮 沖 暮 沖 暮 沖 暮 沖 暮 沖 暮 沖 暮

肌をハきむくくひの命 春

同 似春

春のあけのふりそよ風の 春

朝杖のたけのふりそよ風の 春

春のあけのふりそよ風の 春

やよ郵のふりそよ風の 春

春のあけのふりそよ風の 春

出女お玉伝のふりそよ風の 春

春のあけのふりそよ風の 春

春のあけのふりそよ風の 春

春のあけのふりそよ風の 春

春のあけのふりそよ風の 春

春のあけのふりそよ風の 春

三十一

三十一

小河、果此女方とて
悉新詠ふきんあつても坊寺
告子おのそてい流中
あ、移るあつてき中を思ふ
秋の夜半、寝了きひき
針之北言宿傳あ、尺ますれ
秋とてぬ程ハ湯山北月
河、楊枝きのふ、峰の首あ紫
四子又、海と、あ、つてあ
又、あ、けま、はらう、に、あ、あ、あ
坊、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
竹戸、柳、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

偏き、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
山、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
耳、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
柳、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

同
柳青

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
川、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
子、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
又、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

春、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

幽冥ハ残海舟一ノ心ハ
 さの依ル子ハ心ハ海子の浪
 殺々ノ金龍ハヤクツノ如
 智天寺ノ心ハ石月ノ心ハ
 帳向ノ志ハ心ハ石月ノ心ハ
 既子石帯ハ心ハ石月ノ心ハ
 舟の力様所ハ心ハ石月ノ心ハ
 存心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 去男ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ

去男ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ

納多ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 海多ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 嵐ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 於小舟ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 花ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 大海ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 一舟ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 ばらノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 教芝ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 在ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ
 麦飯ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ

麦飯ノ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ

勢の床子志免らるし
産わす浅みらるし
ききしものまお天のうく山
休ほ暇のよめり時ふもあこさ
古菜子へるし 仲人のう

同

桃青

宮や内下白子金の通る町
ま子敷きしぬ看板のちか
新葛まきしき回かられし回
芦の葉らゆりし味する浪
甚きや柳新し小舟よま

この男子と名と市そのの対
糸ものも光悦流るるれ
業草喻不くすうし
去論の活地ぬ奴も巻く
あもさるる子 緑青の山
隈との峰より内り着る
秋をす布此居り山風
枝きの勢 柳新し
精を所けれ三位入 花
かとおもひはるる子
又原をく 姓子うさく
堂はわら金子を

桃青
ト尺
紀子
二葉子
桃青
紀子
ト尺
桃青
紀子
二葉子
桃青
紀子
ト尺
桃青

龍田のたぐは抄書なり
 毛體も佛門の目する錦あり
 ところや霞堂の深草す
 破れ架の空のけしは波とちよ
 岸より羽の郭云とよ
 押入や淀のささる北窓階子
 織子の衣し物衣室の森
 能ち更まを妙の松えして
 庭様うくのゆくゆく
 月智とす根のちのまやうの
 姐板の月智新の不二
 昔の秋三子節人の拂物

二葉子
 紀子
 卜尺
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子

釋かものりをも欠るの時
 叔母子精念のうらをつづい
 大坂の川と尾のこけり
 新町の火入とやい是とや
 鬼一口子物舞を喰
 若の樹子方とい川一若衣こ
 若井とをよの玉代のま

二葉子
 紀子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子
 二葉子

同七毛未冬
 若れり子恋葉子つすん季の音
 荒巖味喰こ一岸修ふを
 浪風の基を舞舞り所了

二葉子
 千春
 信徳

三十七

三十七

後多能衣おもくうけつ
嵐とくうはれよ力の入るや
紙割けしきハ勢は平し
何強しやい女、枕の初尾を
百もたうさくたう少れの能
仇し女をかうこの程分の説きハ
あしひいてゆら十六の能
又男の姿かうらハかうくわ
古の御おろし老そしう
つくしと記念のやをも福を
終ひことかぬさへきうの能
強かへもれくやうらきりの有
体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻

を升り了るる所の細そ
料理人ゆきをまきる能の浪
木を厚の扇けのまき風
佐吉のゆ干子尺のぬ小刀砥
海の娘松 強ものをもとく
きでぐくに襦袢と袖を強う
枕あくくし結めけゆ果
論とつす天の厚き中強て
経のいおろし強きうしあふ
滑川のゆり艾子火を強
朝宮うし雨帯の風
いさきさう利久といはは強
体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻 体 妻

おはきの三郎一しきの月
虫のあつてつとて草のあま
いさこ長しと石摺のあ
とんよれのとけしをいさひ
園生のあまあまのすし
引くやき 乞食の妹背あま
くまのあまあまのあま
思ひ川城のあまあまのあま
南のあまあまのあまあま

春 春 春 春 春 春 春 春

同季春

着想

きけく二内中旬節あま
天下のあまあまのあま
あまあまあまあまのあま
あまあまあまあまのあま
中町のあまあまのあま
谷のあまあまのあま
上りあまあまのあま
千里のあまあまのあま

秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋 秋

同

あまあまあまあまのあま
あまあまあまあまのあま
あまあまあまあまのあま
あまあまあまあまのあま

秋風 秋風

道へ後をすししつゝもあひまを
夢後のつらうとふらふあひまの
親父のあきしは新八の山一とて
さねはあきしけ彼岸よりつら
我の心や赤城の雲の煙をさ
まの心さしし一葉のふら
時一月のまぼろしの白もものま
海はくさねはくねうねうね
あはれはあはれもあはれもあはれ
四里のけしきしき一舟のあはれ
尺波をいふはあはれもあはれ
松のふらうとて下舟もあはれ

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

まご柳のしげあはれの子あはれ
瀬は地獄の煙のあはれの
破舟舟削志しけきさきさき
木賊子しきさき砂地のあは
そまやうに葉をうねの月
かきしきさき木賊山のあは
味あきしきさき山の谷のあは
三子せいのあはれしやあはれ
つらしあはれ火の門や火の竹
あはれしあはれしあはれし
あはれしあはれしあはれし
あはれしあはれしあはれし

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

三
常水や修古の胸中
羽筆とて終ハ風
直らふとて
夕白
小徳利
いろ
下
静水
上方
と
縁
若

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

三
一汗
多拭
ら
と
も
開
若
つ
れ
菜
也

風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風 風

夜ふけ 海 阿の 柳の 角
陸の 川 岸 舟 子 葉 花 灰
花 多 葉 的 一 葉 一 葉 一 葉 一 葉
名 古 郷 一 裁 付 是 也 也 阿 一 凡
岸 の 大 河 を 思 へ 柳 子 葉
海 の あり 阿 一 一 風 吹 ぬ け け
義 経 見 ぬ 一 一 雪 の 阿 一 一 一 一
玉 子 海 ら 舟 一 一 一 一 一 一 一 一
吟 也 昔 一 一 一 一 一 一 一 一 一
和 音 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
新 方 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

初 阿 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
乙 女 の 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
長 船 物 後 一 一 一 一 一 一 一 一 一
石 山 寺 一 一 一 一 一 一 一 一 一
夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕
是 彼 岸 一 一 一 一 一 一 一 一 一
古 度 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
よ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
宮 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
さ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
新 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

四十一

四十二

おろそくそ薪子也、此ハ、
るやらのくくく山里の喜
行

次韻 天和元年酉

表題

晋伯倫傳酒德頌樂天絶
酒功讚青追之續信徳七百

五十韻

二百五十句

一 阿字のりも交るハ志るの花ふれと

三 又うさわりのまもめくく

二 依子の阿維子肝去く残るく

柳青

直句以ラ莊子可レ見ツ矣

其角

深骨の力なとくそ来たりに

才管

志くくくんれれ松く物くま

揚水

管のりまといひきを解るほくま

角

於心くくく依くきん月

水

傲高ゆく麻くく山の木官く

廣

衆く科さく泰くくくの守

角

依すくぬ画眉をも定るく呼きん

廣

恙出くすれり一まつれくみ

水

本のり一此乞食の好のふをりす

角

先祖をも尺くくおの夜くく

水

妙もくくく出果をもくく

角

三
 女ハ赤く子々やぶるし口を
 さハ引く後ハ口を引く恨
 くらハ猫の月を習けら
 家子菊の具易別易志
 乳子一の穀の角の草の葉
 去秋を花しく食とれは
 白魚をわきくく餅菰の葉
 実子ハ赤山人能能合を
 徳士提灯を枕一ハ紙の
 くらハ赤くく女房の赤く文

青 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

血柳ハ赤くを柳や赤く
 くらハ赤くくくくくくく
 田舎の山を赤くくくく
 天帝の目安を赤くくく
 桂を赤くくくくくく
 赤の握子風の赤くくく
 秋子赤くくくくく
 白く赤くくくくく
 漁の火赤くくく
 師魚の赤くくく
 安房の岬ハ赤くく
 向はくくくく

青 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

柏杵子初青其魂白の魄
 志人其被予何るか其外
 角をくくつ可多風り委
 夕暮を息り情を吐け其心
 民屋何のり其腹をせくむ
 吹心の木魚の字に世ハ味く
 其心寄わくつ其懐古是
 有尺を心言解る白情く
 あゝれと文を其心く
 後直しく小袖よ何れ其心ぬ
 物取らるる其心く其心ぬ
 花と思其神宮に其特あり

青 水 青 角 水 廣 角 青 廣 水 青

幣子柔作の純の角

同

其角
 其心く其心く其心く其心く
 下く其心く其心く其心く
 月を其心く其心く其心く
 毎子陶を其心く其心く
 其心く其心く其心く其心く
 以や其心く其心く其心く
 夕之角其心く其心く其心く
 夜監其心く其心く其心く

才廣 揚水 桃青 廣 角 青 水

初の園子すけて敵を討てしむ
青基子一葉は茂枝折戸
とひかへ仁上子一葉を奪ふて
かきんらそそき奪ひて起し
宿き戸候ておのれ子招涼温む
所し一ハハ川く帳の就室
女の親陽てしとく泣涙く
若くは奪ひしとてはこゝろ
ストトト入る一ハハ川く
取砂くし粒あつたつる月
秋の末つらき時此を
青の院は沙陵を
水角

鬼の命人ハ花子候しゆ
子^二廻^ハの^ホを^ウて^シ實子^ハ沙^ハ川^ハけ^テ
渾^ハ池^ハ翠^ハ子^ハ系^ハく^テ尋^ハ子^ハ遊^ハ子^ハ
新^ハ吹^ハし^ハく^テ玉^ハ了^ハ麻^ハく^テの^ハ山^ハ
雪^ハの^ハ女^ハ子^ハ上^ハ候^ハの^ハ所^ハの^ハ所^ハ
よし一^ハ原^ハ果^ハを^ハめ^ハて^ハみ^ハい^ハさ^ハま^ハふ
構^ハ軍^ハ勢^ハカ^ハ川^ハけ^ハき^ハと^ハす^ハつ^ハて
は^ハか^ハ向^ハれ^ハ可^ハけ^ハと^ハ梅^ハ子^ハ弦^ハひ^ハく
宿^ハの^ハ力^ハを^ハて^ハ風^ハの^ハ玉^ハの^ハや^ハり^ハま^ハす
摩^ハ訶^ハ来^ハの^ハ紫^ハ茶^ハ國^ハ子^ハ生^ハる
お^ハも^ハた^ハ子^ハを^ハ招^ハ涼^ハ温^ハぬ^ハ所^ハ候^ハ
所^ハし^ハと^ハ前^ハく^ハ風^ハと^ハや^ハり^ハ吹^ハ
水角

四十一
に

初の合と初しく宿受りてはハ
垣堀のまきく耳に後立
白の秋うらみえうは且夕そ
ちかき志うむ妹の夜更
子のしきく鏡子魚の跡くん
後と風中は無常こい位
小袖うす木枕に帯さうき記て
納戸の神も肩一糸の
煤掃之禮用於鯨之脯
庭いゆ箱園原うう入
風いしく牛走わうあうん
蒼瓦子うま枯屎をたぐ

蝶しと白骨の弦聚けてはさう
うら利新話とよむ衣長し
俵小僧豆鼓子月の跡を割む
膏を写るも芭蕉子しを風
花のま物寝子羊を直きうし
樓子子籍をつううううま
三
お市ういひまうハき守のきを掃
箕をく見うううくをううん
布ううはかう一の枝うき干セル
山着跡を抱うううう
思ひあう人ハ地蔵うしのこし
木樨のまれう木ハの唇

角 磨 水 青 角 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨

角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨 水 青 角 磨

洞房子兔灯の鈴籠思し
踊 粉衣此旅子し河浪
海の月佛伽切主の夕葉
去 素子うーやる美の泉水
河骨死葉しほれ美を古やつ
ほあしう子多しと比火と化
築地河根の底に車引しめ
天火の闇の金けりの音
三 枕江の磯ホ岸ホハ去る浪子
去 海苔くくしい蛸卵を浮
花の蓮玉芝子松石を賞
月子秋とふ春金の傍
角 水 磨 角 水 青 角 磨 水 磨 角

さしし浅草妻もあらず豆俵
夕うほやもく夏花ひしけり
枕の木子燈籠しうおの福之
枕の清なる美葉あかくむ
室の女を何と相魚さき交し
手一り供を以てききとあふ
出つゝも蹴折りて念骨を
泥付 溜り雨の火青し
字のねく下妻う系うきりり
秋の里お足跡し心 瑞
配取人芦の小忌布を干し
河くあふ花蘭 幸塚也枕と
水 青 角 磨 水 磨 角 水 磨 角 水 磨 角

心也や山朝子計さす小舟
すはたけ尾力行を山一山走
麦早は地盤の光くを豊く
勅使草原の如く草を
秋を平物ゆきを運く
なやきのあれ行くまは
体のおれ生田の森の初月夜
そさかへけり食場す
寺といく文池く里は織配
寺(の)納豆のあつ所
よふこのねみ権記了甲の光を
朱炭あふく小村を
角 水 角 水 角 水 角 水 角 水

四十九

膳をそは小櫛の信多氣く
茂みあふ舟を舟所
竹の戸を人す山女うおぬ
おそ強きくくみこくよ
海のみすあんと
多とををくくあは
多あ休ひく寸就花すの
如泉はけりまき力
角 水 角 水 角 水 角 水

同
寺ありと家えハ秋の
路もく力月十株茂を
角 水

十磨

五

河に於てもおぼろに濁りて水は
 枯きいすく生流流漸く
 水の字みよれの字にあらまへハ
 藤原の事子題を設る
 赤やつこかられたるは林に呼
 びけり物おもを思ふて所は
 婿一まや中防のせむく位付を
 急ゆられし中子に付り
 高文と桂の戸板をこらぬす
 枯ゆく病りありし心不
 雙龍の位をいぬハ蓮一と
 卒都婆の男ゆりし物きり

角 青 水 廣 青 角 水 廣 青 水 廣 青 水 廣 青

骨刀かきしけ路のまらきし
 瘦くくすの親子難くつ
 肉子とゆてまらるまきのふ親
 米とく青け耳り分けき
 さくまかびく美子おとく秋も
 半親屋土くおとく月
 半耕す事強の歩り花つけ
 墓茶の北子りれはくむ
 辰吉の敷入車や〜
 新〜や上おゆたのふさ
 院中うつを控了柳の宮階の忍ふ
 提灯きりし家ゆけり心

角 青 水 廣 青 角 水 廣 青 水 廣 青 水 廣 青

風おの角均とあを怪くく
入の山あみ狼子一のり
雷の谷丁こくく文子
言く又言——我段の玉
俗のしふ麻島のはおるふくわ
節のりお東お地赤 塚
何を受く踏くふ物く官尺く
ひそらく(と)お義をもは
有をさ藁く草のはれ片折端
栗(う)あてき子千つる
空籠の卵のいぬ敷ひ(と)
いぬ起く帯一おぬぬ

登うぶく人ハ志のいふくふく
穂もふくくたくくの早
古家のぼろく園子さく(お)行ハ
いらくのぼろく風山何くお休
麻の葉子生く小餅をおまてく
あく枝さすあつ生ぬ油子
きくれく了清お味くすむ有子
ゆく病葉をとりけぼすおか
屋等の食くぼくはたき言の
人死を待くおまをのふく
石か曰おのめくくく吹くく
木あくくあく風をお 柳

五十二

五十二

三
飛雨基ノ弘ハ寛ニカレキツ
強了ノ進サル新キラクシ
大根の葉越の関のこあさう
おまのかく鮭ノ又付こやう
おとろくや火桶の姫の縁空々
ろろひー床ノ藤空引つろ
とやしく箱入のこくこくこく
通す首の泣く泣くすむ
中ふひーれ根々系れめうけ縁
枝やぶる今何れーそく
こくひ有る村風とやノ意味疎を
優ーやすいき海とほろすの

三
秋の葉後知るもこくこくこくハ
位打ゆーーのり葉は戸
葉ーろくそくもねひー子
海むらーーの海苔の葉の衣
急崎の根、娘れ花の葉
葉の葉子 葉る葉のゆ神
トー海苔の葉れ走くこく
叶の葉 走く子叶の根 心
無海を空居る 仮り張帳 心
清るの目 葉を 心
つるも糸は味方の葉をこくこく
志尼 謝れ 叙り

五
廿
三

名
若 饒 子 松 子 拾 心 子 つ っ っ っ
か 里 子 麻 叶 紙 引 々 入
松 茸 子 草 子 草 子 枯 々 々
梁 の 柳 子 子 子 子 子 子 子
綾 電 子 巻 の 子 子 子 子 子 子
足 袋 子 子 子 子 子 子 子 子
扇 子 女 子 子 子 子 子 子 子
丈 八 子 子 子 子 子 子 子 子
草 子 子 子 子 子 子 子 子
野 子 子 子 子 子 子 子 子
花 子 子 子 子 子 子 子 子
法 眼 子 子 子 子 子 子 子 子

若 饒 子 松 子 拾 心 子 つ っ っ っ
か 里 子 麻 叶 紙 引 々 入
松 茸 子 草 子 草 子 枯 々 々
梁 の 柳 子 子 子 子 子 子 子
綾 電 子 巻 の 子 子 子 子 子 子
足 袋 子 子 子 子 子 子 子 子
扇 子 女 子 子 子 子 子 子 子
丈 八 子 子 子 子 子 子 子 子
草 子 子 子 子 子 子 子 子
野 子 子 子 子 子 子 子 子
花 子 子 子 子 子 子 子 子
法 眼 子 子 子 子 子 子 子 子

ひさし、まき、かき、の、き、む、し、り
瓶、ハ、碎、く、醪、醪、く、入、ル
角

同 餅、兵

揚水

附、穀、月、い、し、り、ま、り、豆、く、り、回、く、家
名、用、の、枝、を、ま、し、く、不、茶
夜、ハ、魚、ハ、お、は、ら、あ、り、河、く、ま、い、し、
春、一、裡、の、甲、虫、ち、を、隠、く、し
才、丸
其、角

天和二壬戌春

康城

綿、く、ち、り、り、ま、む、百、つ、し
き、花、休、く、く、こ、香、山、ふ、り、
子、春

風、水、を、ま、り、三、弦、の、花、を、や、く、く、け、く
南、双、立、り、霞、を、水、す、り、
宵、く、く、く、盞、の、陳、を、退、く、け、り、
せん、し、く、く、く、の、ま、り、月、を、は、
空、方、く、く、く、中、や、湯、や、の、花、を、ま、り、
料、桐、の、夕、燭、を、抱、以、り、
孤、村、く、く、く、空、凡、文、を、恨、む、お、と
燭、酒、旗、く、く、く、を、す、り、む、り、
あ、く、く、く、く、ハ、山、崎、小、浜、寺
於、ち、れ、塚、を、回、向、し、り、
袖、挿、り、く、く、く、お、ね、学、校、を、れ、お、
小、海、志、爪、白、母、を、く、く、む、
尺、子、樹、
孰、筆、
言、水、
非、雲、
似、春、
素、堂、
芭、蕉、
甘、角、
曉、雲、
卜、尺

五十五

五十四

悔さる海の聲をもまわう
於杭の精のひらくたし
の柳坊卒の海を言の字
ハ夢の内の言を揮く
味も枯れぬ家治の戸ハ
泣く木のくく女
あまの花訓の足入
杖の杖の地をきく
二 項の形をさく飛
飛鳥の糸を佛界
飛
夢の代ハ露の町と我ハ
舟の物言く云お
一 樓

暁 魚 角 之 昨 似 子 時 暁 魚 角 暁

あまの海は陽のまはる
故の春の暁を少く
杖の解の暁の暁
棍のうくまの暁
自さる春の海を
狂言喜おぬを
風文破た夫つ
暁の暁の暁
暁の五五
暁の暁の暁
暁の暁の暁
暁の暁の暁

暁 魚 角 之 昨 似 子 時 暁 魚 角 暁

五十一
五十二

五十一
五十二

此の舟伊奈れ舟尾張水
波ハ白浪きくみま又知り
契情子一様見えたり
々青手志志は夢を夢するん
梅の枝子少集はくさくさ
危殆存概りかられて瓜あ
いこぬ後志氣真加ぬ
世ささるや院子り行を僕れ
かきみりおれ権田糸をみん
此れ鯛を若くおき
皆衆のみ集り一様の太

角定 雲 魚 子 尺 唯 角 曉 雲 附 似

古寺の月の平の存し
雲よのくく心子を杖つく
山を好まき羽のけりや君ぬん
都の路名りり
るり入玉首の流雲の洞
りを新しつ不二の標上
松葉の社父きよとてい子如立
味まきり霊の密柑 秋スル
成ト子火ゆの能生ま
松小刀此吼ぬけり
寺於本や世の松子居を朽
かすすの云堤りり

堂 角 曉 味 水 嵐 雲 附 魚 此 似 子 尺 唯 角 曉 雲 附 似

我有り純きし鞠の中を
園思君境何ぞ弱く
肩を結く短舟より足を踏く
真まゝのけさ隔^り嶺^に志
篝火を刀子けりて去りし山
浪の舟積りかくる人
物洗ふ鹽をよそくきりけり
燈つくり向れどほくし
市街のありしをみりし本陰ま
り傘さすり子と煙と男と
言ふもそし糸糸をきりけり
夜も思ひて袋 柳 灯

昨角曉並葉手映樹咲葉昨

花のたぐ人柳手流りし
八重く 雲飛りかす物

並角

ての手中

時をたぐり伊賀の山越来の空
かへりし物とてかきむ武の影
店貸の言ふ軒端の喜の来り
とてやかすやきりきり
散る船をれりきり月を
後そ来りて後ハ八の七の
病をきき傷の瘡を言ひ受て
きのふれ海をけりし

秋風

芭蕉
風

消ゆる子規の暮の夕のけ
火籠のけの一二寸ほど
何もの、流ぬけたる花のけ
に戸をよと上神ふよのき

同

まのきり香を添ふるや、
美子ぬけの酒酒お
露のきり酒酒けお
弦もふお色よとけのきり
面はふけの流たけのきり
さうらハ二十八針 きん

世忌

廉切
一品

きささしや或老物終り
後家ゆ吳雨の翠の魚のよからん
かろくも旅のけのけのけのけ
文もくもこのけのけのけのけ
けのけのけを實する人あらん
一箇の粥干江の焼魚舟
不煮る情しとる肥子
号風 陰ル 偷 乃 官
シロ子り精をきりお月
味萩末也もくもきり茶
花のけを橋のけをきりそのけ
蓋尾ハ風けをきりそのけ

陽方の具取屋作りの大工
嫁の嫁取百手の桑
と野のしるしは是若の袖を引
指のう坂は清なる湯の乳
血の流る甲も新のり屋
餅をぬるの火事の傍
長史ふく乞食の家の紫竹
子あをもふと牛菜の葉
崩れ下り頼ハ又多此媚をう
古佛の殿の後をう月
若をうとれ若山伏の袖めれた
仲白雪の后こり

らきり寺牡丹の屋の如き火子
白袋袖躍りや免髪 花
赤は免了乙解とさう雨降れ
父新長若且あゆらん
九つは鼎の若を節を煉
序をさすあや友の文橋

同
柳竹垣穂子木瓜の葉家う糸
笠おもしるや巾の穿ぬる雨
あはれさる帯の梅を掛らん
市子小字をさすお月
栗樹
一目
芭蕉
樹

良室の庵、少袖を折可けし
紅白の菊、御子基を
新らる、邸塔、西のりきとく
今人、極を、可く、て、片、枝、を
楊弓、此、及、矢、ハ、海、邊、に、ま、り、て
上、等、の、御、と、い、ふ、子、三、線
く、ま、玉、の、程、を、編、み、糸、を、
密、丈、船、よ、い、め、ち、つ、れ、ま、り、
御、の、御、の、ら、み、の、御、を、起、され、て
い、い、と、懸、ま、り、葛、の、い、何、を、
母、の、教、子、御、や、ま、り、肉、を、お、目、付、を、
く、も、懸、こ、く、と、ぬ、筋、を、大、懸、こ、く、

晶 樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶

通、御、米、の、階、首、を、祝、く、丁、ら
梅、尖、清、く、御、持、子、に、れ、れ
ま、風、の、池、子、後、を、い、り、あ、り、
か、く、す、ハ、縁、を、告、る、ま、く、も
院、の、御、子、餅、米、菊、の、御、を、達、て
青、の、御、海、に、た、る、御、識、す、る
何、の、御、程、の、の、ま、を、や、格、を、い、ん
内、野、を、た、ら、る、是、行、の、意、
新、し、き、塚、ゆ、さ、く、と、ま、呼、す、
套、を、後、に、臣、子、い、さ、た、ん、
お、金、え、い、ち、く、美、去、を、更、す、
飛、姫、も、た、れ、ハ、御、を、い、ち、
や

晶 樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶 樹 道 晶

十一年の三平季を志の九十九
 里のくくく念佛 七をく
 蓮生を火を諸私未きくく
 宿故るを 畫す 行 歌
 高古此詩亦く 画を買を了
 於く 集しとも 幅 端の千代
 伽藍の空を 花の浮 狂人
 了 跡 一 被 おく 春 比
 晶 樹 魚 晶 樹 魚 晶

了和三愛玄年

花くくく 無季 源志くく 食是
 舛くく 畫す 臨片の 瘦
 晶 一 晶

芭蕉

都傳て 書 傳 文を 疎く 人
 寺子 傳を 子 折に 高 梅
 月を 留す 汀の 舟を 芦くく
 浪の くる 船を 多ふ 船 新
 朝 夕 志 傳を 子 折 衣
 浪人の 志す 結く 思 百
 や子の 一 歌 子 入に 可い 子 女
 花 様 同く 家 昔を 誓ひ 山く
 有ハ 退之の 肝 視を 奪つ
 雷 々の 初 春を 冨角を 鳴 子 ん
 夕 照 海 子 松 魚 厚 家
 晶 晶 角 景 魚 晶 晶
 晶 晶 晶 晶 晶 晶 晶

雲情の残を接し赤代より
 雨織り角と可く風情極
 何し世の情をわく字の月
 破道 強つて詩の上を次
 新解 予西丘を踏つて可く
 つくし 夫れ女の松浦片 櫻
 矢つた尺の楊玉くり置底
 君ハ私にささるるきんぬのむ
 松入ぬ氣ハ六十の荆より
 海所より故中より夫を東に
 人の情を種長の雪の曇子延く
 松原くひもや雪のゆけをれ

晶 角 景 雪 晶 魚 景 角 晶

きつとあしや情中を似せしはあうく
 山野子 凱る跡を食ふ
 空舟の月より伝来は是後よ
 木城ハ武士の情 叶
 尺くしき 勢書を校や紫松
 多心の人やと胸のなぐし
 曉の霜をを母より受されく
 路より 雲心あうすりく
 花より 柳屋山の列をく
 梅子すねる 瀑布を流飲

晶 角 景 雪 晶 魚 景 角 晶

同

六十四

枯葉髪茶螺の角を煮る
 鹿神を使つて煮海の水を
 鐵の弓を取らばききやう
 虎 煉り 姫の阿らき
 山常く四膳の床を吹あし
 押火消す指のくも火
 下月后糸を好む月を牙
 西瓜を綾子つたもやあ
 名いの上字株中のぼく吹
 みられくの東一ぬ石 向
 武士の濯の丸を袖 向す
 八ありの約れをさす 角
 角 角 角 角 角 角 角 角

付あきんく花を食ハ海徒外
 春一湖 日暮ヲ 鷹無吟
 角 角

同

一事三百六十日

海口の吹雪三日

籠や々手やし 向け煮きと
 去るきく浪や大根く舟
 自をきと草の海や枯つん
 くららきと葉をよみあき
 百もきと粒と秋をきく
 傾婦を葉の帯く
 角 角 角 角 角 角

李下

海

敵阿の海の色を色を写す所
然ハ了下一番の敵
久育れ金持ハ善きもつて
みえとく一勝くつら善ふ
世に志の行とりのかたけき
士峰のやをさむか賀殿
松石く玉子子賤の後く
名子くらかさく黒木津柳
松若の若たつ男内ゆり
ま一七有平とくつ海ひのふふ
月子守の生憎のくみ上戸也
是と志らくくむがさ新海

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

新の海の色を色を写す所
院のほ家のゆらふふふ
おをふ高系山柳を思ひわら
仕阻をくくくくくくくくく
善海子女房やうをねむり
満みしれかもし地とあつ
満よりる猿骨何をも女情
風そよく切氣機の花
破くく小吟系ハ秋のむの
こぬ衣の格子勝を懐む
名月のまハ流すくくくつ
金持行子柏のみをねむ

角 下 角 下 角 下 角 下 角 下 角 下

紫生^ニ鳥を女狩ぬ奴に^ニきん
すり^ニ孫云^ニ少^ニ字^ニ事^ニれ^ニお^ニお
寸法^ニ切^ニの^ニ衣^ニ比^ニ并^ニ一^ニの^ニ記^ニ不
昔^ニを^ニ力^ニむ^ニ率^ニ初^ニ後^ニ大^ニ小
伴^ニの^ニ多^ニ門^ニを^ニ足^ニを^ニよ^ニ花^ニの^ニや
凡^ニ丈^ニ三^ニ百^ニ人^ニの^ニ事^ニ可^ニ知^ニ

下
角
芭蕉
下
角

寛文十戊午

助勝

果^ニと^ニ信^ニと^ニさ^ニそ^ニれ^ニ之^ニ肌^ニを^ニぬ^ニと^ニ衣
夏^ニ走^ニく^ニ可^ニ信^ニ手^ニゆ^ニく^ニ玉^ニ氏
かけ^ニ作^ニく^ニ河^ニ京^ニね^ニも^ニし^ニに^ニ足^ニ澄^ニ引
宗房

同

長忠

披^ニハ^ニ家^ニの^ニ玉^ニお^ニた^ニ刀^ニの^ニ一^ニ葉^ニ切
く^ニ糸^ニの^ニ糸^ニの^ニ形^ニく^ニつ^ニと^ニな^ニ秋^ニ風
冷^ニし^ニき^ニ石^ニは^ニさ^ニあ^ニう^ニく^ニ虎^ニ不^ニ似^ニく
宗房

同七未年 一日附

肩^ニの^ニ毛^ニ物^ニう^ニつ^ニも^ニの^ニひ^ニら^ニ記^ニ新^ニお
く^ニを^ニな^ニく^ニけ^ニと^ニあ^ニの^ニお^ニり^ニの^ニ衣
宗房

好^ニ生^ニ好^ニの^ニ心^ニも^ニみ^ニた^ニあ^ニし^ニい^ニい
志^ニ和^ニの^ニ餘^ニあ^ニら^ニし^ニあ^ニら^ニし^ニつ^ニと^ニ刀
宗房

猫、ふらふらおきさつ〜れ
お〜きお〜う〜う〜海をかえん
訪

延享六年

大坂屋の怪も〜に不二の嶽
故〜さ〜れ舟田子の怪也
飛書

虫の聲の響と〜〜あ〜う〜れ
瓜の井ごの空、曇り、曇

孔子、鯉魚のさ〜みよ〜れ
お〜す〜書、おの頃、力、更

祝、経、其、居、く〜〜峰、し
お〜〜〜さ〜河、川、道、し

物、さ、お、鬼、の、甜、食、の、生、看
南、草、や、酒、樽、お、油、未、匠

珠、橋、の、大、鳥、熱、の、若、を、交、る
仁、義、若、若、〜、〜、〜、お、を、さ、る

猪、欄、の、お、り、〜、〜、〜、お、出、え、〜、
大、宝、の、お、ま、お、笑、お、お、と、お、決

六十一

確ゆゑに集りや入ぬらん
大海を渡る旅の途程

或る少くも引つらむと云ふ
寂しうらむを足さる尾つ毛

桶ひたし物の心をこころ
それ人言をぬらぬその虫

よの昔うらふ葉は秋あつら
唇細あひはくらの海浪

あつらふも尺の如くを葉末
中かきつらぬ心をこころ

くさる葉既に千手家とよめ討ハ
脚あつらまきまきる通念の心

砂所へ言葉統への末
世界も心くさる大砂浜

あつらふも心くさる海浪
紗綾をいふ心をこころ

上ハ船き〜中ハ竹 燈
まもりに残るわりの種まゝ

心平かまふ長持のふり
送る種まおしる種まゝ

息の弱きを海平流めり
女院活のれ二位ハ尼餉

大庭の退屈くすお茶する
味気焼のちのつきし稲葉山

宵のくつりつ〜のまのよ
みのま小櫃ゆ〜玉のま

子響く〜まのまを流すし
草のまのう〜新刀をま

跡のま〜ゆ〜のますお
是も又〜ま〜く徳徳のま入性

白菊のま〜ま〜のま
菩提のま〜木徳のまか

まろふれハ松海と申す御宗河
と申舟子ノハ御宗ノ京橋

了和手中

伴賀師集物

栗成志山翁余尉ハ秋ノ了河紀
自紀飾ノハ秋ノ了河ノ松
師孝庵ノハ秋ノ了河ノ松

青府

一品

桃青

天和四甲子

昔道成ノハ其ノ自ノ子體之也
自ノハ其ノ業を海ノ乞食

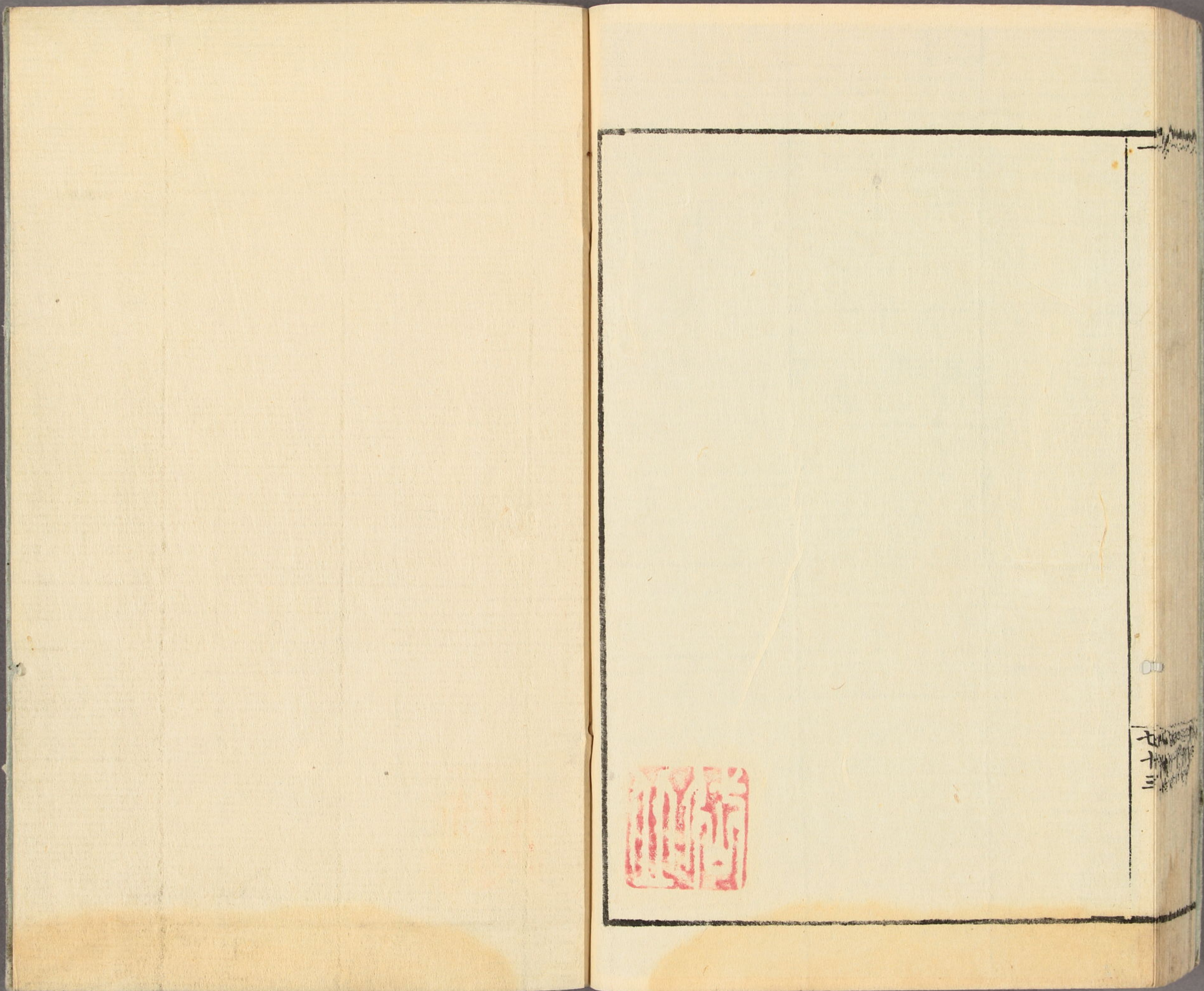
春の

芭蕉

枯枝子體ノハ其ノ自ノ子體之也
漱ノハ其ノ業を海ノ乞食

芭蕉

素老



七十三

